



黄色いベストとEU離脱

海外出張の機会には、可能な限り街の中を歩くようにしている。街をゆつくりと歩くと、その国で起きていることを庶民に近いところで理解することができるようになるからだ。

また、日本にいると2時間も3時間もゆつくりと街を歩く時間を取ることは難しい。ゆつくりと歩くこと、いろいろなことを考えることになり、自分の頭の中を整理する上でも良い機会だ。こうした散歩の中で思いついたことはたくさんある。

伊藤 元重 学習院大教授(国際経済学)

昨日は市内をゆつくりと3時間ほど歩く機会があった。町の光景からいろいろなことが見えてくる。フランスで暴動にまで発展して大きな問題になっている黄色いベストを着けた人たちの抗議行動は、ロンドン市内でも散見できた。主張の詳しい内容はよくは分からないが、イギリスのEUからの離

脱を求めているようだった。英国の国旗を持っている人が多かった。フランスの黄色いベスト運動とは違うのだろうが、フランスでの抗議活動に触発されて、イギリスでも黄色いベストを着る人たちがいるのだろう。欧州では欧州統

セルフレジで見る日英の違い

合に懐疑的な人たちが増えており、中には過激な排他主義を主張する人たちもいるようだ。こうした流れは英国にも広がっている。多くの国の国民が内向き思考になっていて、懸念する専門家は多い。トランプ大統領の保護主義政策を支える有権者たちも、英

国のEUからの離脱を求める人たちも、グローバル化の流れに強い不満を持っているようだ。私がロンドンの市内で見かけた「イギリス版の黄色いベストの人たちも、そうした流れの中にあるのだろう。さて、イギリスのEUからの離

脱ブレグジット(BREXIT)はどうなるのだろうか。当地での専門家の話を聞いても、よく分からないという答えが返ってくる。期限が迫っており、EUとの合意なく一方的な離脱となれば、大きな混乱が懸念される。そうしたことが起きないように、とりあえずは行動の時期を延期するだろうというのが有力な見方の方である。ただ、先の見通しが難しい政治の問題となっているので、誰も先のこととは分からないと言っている。

日本の経営者は保守的に話が変わるが、ロンドンの街を歩いていて、もう一つ気になったことがあった。それはスーパーなどの店で、客が自分で機械を使って支払いをするセルフレジが非常に多かったということだ。レジの人員を減らすために、積極的に機械を導入している。

これと比べると、セルフレジを散見する程度でしか見られない日本の光景が異様に見える。人手不足という意味では、イギリスよりも日本の方が深刻であるはずだ。それでもセルフレジの導入が遅れているというのは、日本の経営者の対応のスピードが非常に遅いということだ。

別の機会にまた書きたいと考えているが、日本の経営者は非常に保守的になっており、社会の変化を遅らせているように思える。人手不足を一方で嘆きながら、他方でそれへの対応が非常に遅れている。セルフレジの数での日英の違いにそれを感じた。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。